

# みどりの樹

第2号

1999. 冬



小白川キャンパス(人文学部・教育学部・理学部・本部)



飯田キャンパス(医学部・附属病院)



米沢キャンパス(工学部)



鶴岡キャンパス(農学部)

山形大学は、県内にある唯一の総合大学として研究・教育の中心的役割を担い、これまで多くの卒業生を社会に送り出し、地域社会との強い結びつきを保ってきています。

人文学部・教育学部・理学部・附属図書館・総合情報処理センター・本部のある小白川キャンパス並びに医学部・附属病院及び教育学部附属養護学校のある飯田キャンパスは、蔵王連峰の麓、産業・文化の中心である県都山形市に、工学部・地域共同研究センターのある米沢キャンパスは、最上川の源をなす吾妻連峰の麓、伊達上杉藩ゆかりの城下町米沢市に、農学部のある鶴岡キャンパスは、日本海に近く鳥海山・月山を望む米どころ庄内平野の鶴岡市にそれぞれ位置しています。

また、県庁の近くには、教育学部の附属幼稚園・小学校・中学校がある松波キャンパスがあります。

現在の大学キャンパス

# 学長から

## 山形大学のこの頃

山形大学長 成澤 郁夫



なりさわ いくお

山形大学長  
専門：高分子材料強度学

おかげさまを持ちまして去る十月十五日に山形大学創立五十周年記念式典と祝賀会を盛大に催すことができました。同窓生や地域の皆様方の暖かいご支援とご協力を感謝いたします。

記念式典の挨拶のなかでこの節目が山形大学の元年となるということを示しましたが、いま山形大学をめぐる状況が急激に変化しています。新聞紙上でもご承知のことと思いますが、全国に九十九ある国立大学を国立ということをやめて独立行政法人という新しい形態にするという動きです。独立行政法人という新しい呼び方には私たち大学人もなかなかなじめないのですが、必ずしも国が直接にやらなくてもよいが、完全に民間にまかせてしまうのには公共性がある業務を効率的に行うための組織であり、また、日常の決まった業務を行う役所は別ですが、

短くても四年、長ければ大学院博士課程の修了まで九年間をかけて専門家を育てたり、基礎的な研究をじっくり行うという大学にはこの制度の適用が難しいようです。山形県は大学への進学率が全国平均より約一〇%も低く、大学の収容定員も他地域と比較して不足しております。低廉な費用で大学教育が受けられる国立大学は地域にとってまだまだ必要のようです。高等教育も国の責任で行うという明治以来の仕組みを変えるためには、十分時間をかけて議論しないと、教育は一朝一夕にして完成しないだけに取り返しのつかない誤りを犯してしまう心配があります。これを機会に地域の皆様にも私どもと一緒に大学の在り方をいろいろ考えて頂ければと考えております。

さて、大学のなかの方ですが、昨年の大学審議会での答申やこれを基にした学校教育法等の改正を参照しながら、いろいろの改革に取り組んでおります。なんといつても大学は学生のためのものですから、新しい期待と知的好奇心に燃えて山形の地に入学してくる学生が満足しながら勉学し、大学卒業生として社会で活躍できるように十分な実力をつけてもらうことが大切であります。このために教養教育や専門教育はどのように組み立てればよいのか、あるいはさらに勉学を継続したい学生のために開かれてい

る大学院をどう高度化すればよいのか、留学生をもっと数多く受け入れるためにはどうすればよいのか、地域の人のための公開講座や大学開放はどうあるべきなのかなどについて、大学改革特別委員会というところで熱心に議論してもらっております。いまの大学の業務は多様で複雑になっており、新たに副学長などを設けたり、地域の意見を大学の運営に反映するための仕組みなどについても議論を進めております。

国際的にも国内的にも優れた研究を進めることで、その成果を直接あるいは教育を通じて地域に還元しながら二十一世紀を目指す山形大学に是非ご注目願いたいと思います。



小白川キャンパスのイチョウ並木  
絵：山形大学教育学部教授 遠藤 賢太郎

# 二十一世紀を迎えるにあたり 改めて我々の「生活課題」を問う

山形大学教育学部教授 佐多 不二男

私の専門は、社会教育です。大学院では、生涯教育を担当しています。「社会教育」と「生涯教育」を

私流に定義いたしますと、社会教育とは、人々が自分たちの生活や人格を高めるために行う相互教育ないし自己教育活動であり（ただし、学校で行われる教育活動は除く）、生涯教育とは、人の生涯にわたる学習活動を保障するために図られる教育の条件整備への努力である（だから、ここには学校教育も社会



「人と人との出会いを楽しむ社会教育実習の一コマ  
(山形県青年の家において)

教育も含まれる）となります。

このたびのテーマの関わりで話を進めますと、社会教育、あるいは生涯教育のどちらの用語を使うにしても、そこで展開される学習活動にまつわる重要な概念が存在します。それは、「生活課題」という言葉です。先程の社会教育の概念の説明のところで示しましたように、我々が相互教育活動や自己教育活動に取り組むのは、自分たちの生活や人格を高めたいと願うからなのです。しかしながら、自分たちの生活や人格を高めていくには、自分たちの生活の中に存在する様々な生活課題を解決ないし克服していくような努力をしなければなりません。

この生活課題を自分や自分の周りの小さな集団だけの利害に限定する人が沢山いますが、私は、そうしたちっぽけな見方は誤っていると思います。時間的にはもつと後の世代までを、空間的には国家などの枠を越えた世界全体を視野に入れながら、人間が人間らしく生きていくために克服していかなければならない生活課題を考えてほしいのです。

実は、人類の生存の危機を、人口、食糧、天然資源、資本、汚染という、ある程度数字で把握できるものをシステム・ダイナミックスの手法でとらえながら予測した報告書が三十年近くも前に公刊されています（ローマクラブの第一報告書『成長の限界 人類の危機』ダイヤモンド社、一九七二年）。

そして、現在、地球は間違いなくローマクラブが発した警鐘の意味する方向へと向かっているのです。この危機を人類は乗り切ることができのでしょうか。私は、難しいと思っています。世界中の、特に先進国のより多くの人々が現在浸っている「持つ存在様式」の態度から抜け出して、「ある存在様式」の態度を身につけるようにならない限り。つまり、フロムが言うように、「より多くを持ちたい」「より豊かになりたい」という意識から脱却し、「他者を愛し」「他者と分かち合い」そして、他者に与える」といって、真に人間的な生き方を志向するようにならない限りは（エーリッヒ・フロム『生きるということ』紀伊國屋書店、一九七七年）。

大学には社会から様々な要請が投げかけられていますが、上述のような生活課題をもっと国民に知ってもらおうような働きかけを展開したり、そのような課題意識を持った職業人を養成したりすることが、今日、何よりも大学に求められているのではないかと、私は考えています。

大学改革も、そうした課題解決に貢献するような方向に進んでいってほしいと願っているところです。



さた ふじお

山形大学教育学部教授  
専門：社会教育

# 中国の大気汚染と日本の役割

山形大学理学部助教授 柳澤文孝

## はじめに

中国は一九八〇年代に入つてめざましい経済発展を続けています。一方で、大気汚染や水質汚染、廃棄物問題等の環境問題が発生しています。山形大学・大阪市立大学・信州大学・地域地盤環境研究所の研究チームは四川省政府の招きで地元の成都理工學院とともに四川省の成都市と峨媚山市で大気汚染と地下水汚染の合同調査を行っています。(写真1・2)

四川省は中国南部にあり周囲を高い山々に囲まれた四川盆地の中にあります。人口は九六〇万人で三国志の都としてあるいはパンダの故郷として有名な所です。環境問題とは無縁そうな地方都市ですが中国の中で最も大気汚染のひどい所としても有名です。それでは四川省の大気汚染と酸性雨についてご紹介します。

## 四川省の大気汚染

大気汚染物質を二十四時間採取したフィルターが写真3です。左が山形市で右が成都市で採取したものです。フィルターの汚れ具合が全く違うことがわかります。分析すると全ての項目で中国の方が日本より高いことがわかりました。汚染状況は日本の数倍から数十倍といったところで、鉛、カルシウム、硫酸が多いのが特徴です。鉛は有鉛ガソリンが使われていることによりです。中国でも二〇〇〇年から無鉛ガソリンが使用されるように



日中共同環境調査団 (写真1)

なることから鉛は減つていくでしょう。一方、カルシウムは道路がほとんど舗装されていないため道路粉塵が多いことに原因があります。さて、中国のエネルギーの中心は石炭です。中国産の石炭はイオウ分を多く含んでおり燃焼効率が悪いのですが排煙対策はほとんど行われていません。そのため、石炭を



やなぎさわ ふみたか

山形大学理学部助教授  
専門：安定同位体地球化学

燃やすと多量のイオウ酸化物がでて大気中に硫酸が多くなるのです。日本のエネルギー源は石油が中心ですが、排煙脱硫装置などの環境対策が行われていることからイオウ酸化物はほとんどでないようになっていきます。このため、日本の大気汚染は燃焼の際に大気中の窒素が酸化されて生じる窒素酸化物が中心で、大気汚染物質には硝酸が多く含まれています。さて、中国といえば自転車大国という印象でしたが次第に車社会へと移行し始めています。あと、五年十年後には自動車が増加して大気汚染問題の中心は硫酸だけではなく硫酸と硝酸になっているかもしれません。

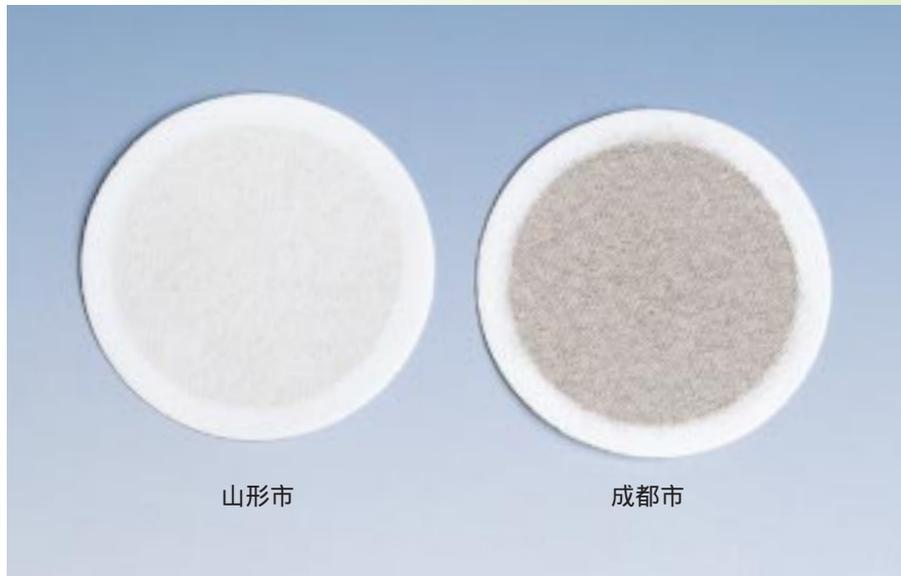
## 四川省の酸性雨

四川省は中国の中で最も酸性雨被害の深刻なところとされています。成都市や重慶市といった人口の多い工業地帯を抱えていることと四川盆地という大気汚染物質がたまりやすい地形をしていることが原因と考えられます。峨媚山の様子を写真4に示しました。峨媚山は孫悟空の住んでいた山として、また、仏教四大名山の一つとして有名です。峨媚山に

はモミの一種である冷杉が生えています。標高二、五〇メートル以上になると写真4にあるように幹だけになって立ち枯れている様子が目立つようになります。峨媚山は霧の発生する所としても有名です。大都市で発生した大気汚染物質が風で運ばれて霧に溶け込み酸性霧を発生させて植物に影響を及ぼしているのです。また、峨媚山は一九九六年に世界遺産に指定されたことから観光客が増加しています。標高二、五〇メートル付近まで車で登ることができるよう整備が進んでいることから車の排気ガスと道路粉塵で周辺の環境が大きな影響を受けています。



試料採取の様子（写真2）



大気汚染物質で汚れたフィルター（写真3）

おわりに  
中国は奇跡的ともいえる経済発展を経験しておりエネルギーが足りないといった状況が生まれていません。エネルギーを確保するために排煙対策は行われないまま都市の中心部に火力発電所が建設されて大気汚染を更に深刻にしています。中国は人口も多くの面積も広いことから中国の環境問題の国外への影響は日本とは比べものにならないくらい大きなものとなる可能性を秘めています。日本では特に日本海側の地域では冬季になると硫酸を多く含んだ酸性の雪

が降ることがわかってきました。この原因として石炭を燃やすときに発生するイオウ酸化物が大陸から日本に飛来しているのではとの懸念が広がっています。そのため、中国の環境問題は中国一国だけの問題ではなく、アジア、ひいては全世界の問題となってきました。とりわけ隣国であり一九七〇年代に公害の経験を持つ日本の果たさなければならぬ役割は大変大きなものといえるでしょう。



立ち枯れて棒のようになった峨媚山の冷杉（写真4）

# ハンガリーワインは「文明」の味？

山形大学人文学部助教授 高橋 和

秋の収穫祭を過ぎると、日本ではフランスのボジョレーヌーボーがいつ解禁になるかという話題が巷をにぎわせています。あまり知られていませんが、ユーゴやブルガリアなど東欧のワインも日本には多く輸入されています。とりわけハンガリーのトカイ地方で生産される「トカイ」と

いう銘柄の貴腐ワインは薄い琥珀色のワインで、ワインがお好きな方であればその名前くらいは聞いたことがあると思います。ハンガリーのワインでもう一つあげておきたいのが「エグリ・ピカヴェール」という赤ワインです。エグリ・ピカヴェールというのはエゲル（地名）の「牡牛の血」という意味で、英語のラベルでは「ブルブラッド（Bull's Blood）」となっています。この名前のおかげで、このワインを口を含む度に私は吸血鬼になったような気分になることもしばしばです。ドイツのモーゼルワインの「シュヴァルツェ・カッツェ（黒猫）」といった優雅な名前に比べて、モーゼルより格段に芳醇な香りを放つこのワインがどうしてこのようなおどろおどろしい名前になってしまったのでしょうか。

十六世紀はじめ、オスマントルコがその勢力をバ



ルカン半島から中部ヨーロッパにまで拡大しつつあった時でした。一五二六年モハーチの戦いに勝利したオスマントルコはハンガリーを支配下に治め、さらにウィーンの攻略を狙っていました。そんな時期のハンガリーの一寒村エゲルでの話です。村を襲ったトルコの兵士は、食糧・家畜と手あたり次第の略奪を行い、さて略奪するものにも尽きて最後に残ったのが大きな樽。中を覗いても暗くてよく見えません。そこで村人に「これは何だ？」と尋ねると、咄嗟に機転の利く一人の少年が「牡牛の血だよ」と答えたために、トルコ兵はその樽に手をつけずに村を出ていったそうです。こうして少年の機転でワインの樽が略奪から免れることになったという逸話から、このワインが「エグリ・ピカヴェール」と名付けられ、ハンガリーをトルコから護った英雄的行為として今に伝えられています。

イスラム教徒は、生き血を飲んだり、生肉を食べないという文化的な違いがこの「誤解」の鍵になっているのですが、イスラム教徒は「お酒」だつて戒

律で禁止されているはずなのです。「樽の中身は？」と尋ねられて「牡牛の血」ではなく「ワイン」と答えても、彼らが手を付けることはなかったのではな

いかと思うのです。では、なぜ「牡牛の血」でなければならなかったのでしょうか。略奪される側のハンガリーから見てトルコ兵は「悪者」でなければなりません。しかしお酒に手を付けなかったとなると、ストイックなイメージを伴ってしまうのです。イスラムに対してヨーロッパ文明の皆であったハンガリーにとって、「野蛮」なトルコを機知で負かせ、キリスト教文化において重要なシンボルとなっているワインを救ったという逸話は、ハンガリーにとって「文明」のヨーロッパと「野蛮」なアジアという対立を象徴し、自分たちは「文明」の側に身をおいているんだよという優越感をくすぐってきたのではないかとつい思いめぐりたくなくなってしまいます。



ハンガリーの「トカイワイン」



たかはし かず

山形大学人文学部助教授  
専門：国際関係論

# 学 生 た ち の 活 動



今回は、第八回全日本大学女子サッカー選手権大会東北大会において、八年連続（東北予選がなかった時代を含めると十一年連続）の全国大会出場を勝ち取った山形大学女子サッカークラブを紹介します。

本学の女子サッカークラブは、平成元年に創部、現在の部員数はマネージャーを含めて学部学生十二人、もちろんすてきな女性のための少数精鋭チームです。

東北大会は、去る十月二日、福島県郡山市の西部サッカー場において、山形大学・郡山女子大学及び盛岡大学の三チーム（宮城教育大学は今回棄権）による総当たり戦を行った結果、対郡山女子大学戦二対〇、対盛岡大学戦四対〇の二戦全勝でみごと全国大会への出場キップを獲得しました。キャプテンの大久保景子さん（教育学部二年生）から、東北大会の結果と全国大会に向けての抱負を伺ったところ、

「東北大会では、これまで先輩たちが築き上げてくれた全国大会の連続出場を止めてはいけないというプレッシャーと、交代選手が一人もいないというケガへの不安感との戦いでした。今年も全国大会の出場



権を確保でき、ほっとしています。

全国大会でも、東北大会同様、試合中に仲間がケガをしたらどうしようという不安感にかられると思いますが、昨年以上（準々決勝敗退）の成績が残せるよう悔いのない試合をしてきます。」

と、力強くその想いを語ってくれました。最後に、大久保さんはもっと大きな心配を抱えていることを話してくれました。

「私たちのクラブは出場選手十一人ピッチのチーム。しかも、四年生が三人いるんです。今のままで、来年は東北大会すら出場することができません。全国大会が終わったら、すぐに新しい入部者を探さないと……。」

でも、これまでの伝統を閉ざさぬよう、精一杯頑張ります。」

全国大会は、十二月二十日に、兵庫県神戸市の神戸総合運動公園ユニバー記念競技場において開会式

が行われた後、二十一日から、同ユニバー記念競技場を主会場に、全国大会の火蓋が切られます。出場チーム数は、地域ブロック毎に、北海道一・東北一・関東四・北信越一・東海二・関西四・中国一・四国一・九州一の十六。一回戦の対戦チームは、女子サッカーの強豪である関西代表の立命館大学女子サッカー部です。

みなさんからも熱きエールをお願いします。

フレ！フレ！山形大学 ファイト！ファイト！女子サッカークラブ

なお、本クラブは、毎週月・水・金に山形大学医学部（山形市飯田西二丁目二二）のグラウンドでエキサイティングな練習をしています。

全国大会の結果については、次号でお知らせします。



# 「皆様からのQ&A」コーナー

Q 「皆様からのQ&Aコーナー」がありますが、どのようなことを質問すればよいのでしょうか？（山形市/女性・36歳）

A みどり樹は、地域の皆様に山形大学の教育・研究の現状・将来計画等を紹介することを目的として発行していますが、本学からの一方的情報発信ではなく、「皆様からのQ&A」コーナーを通して、地域社会との双方向的な情報交換も心掛け編集していきます。本学のいずれの学部も、「双方向的な情報交換」を心掛けて編集・発行した広報誌は、これまでなかったため、正直な話、編集委員会でも皆様からどのようなお声が寄せられるものか見当がつかないでいるところです。また、地域の皆様も本誌にどのような問いかけがふさわしいのか、戸惑いもあるかと思えます。

内容に特に制限はありませんが、本誌の目的である「山形大学の教育・研究の現状、将来計画等を紹介など」に関連し、皆様と情報を交換するに足ると判断されるものについて、おこたえすることになります。ただ、「教育・研究云々」と言われても具体的な声とはなり難いとも思います。例えば、既に発行の本誌中の記事はすべて、「教育・研究云々」に関するものだから、それに対する質問・感想などもお声としてふさわしいものであると考えられます。また、個別の学部あるいは本学全体に関して日ごろ抱えている疑問、感想・意見等も当然歓迎します。さらに、本学は六学部、教員約八〇〇名からなる専門知識を有する研究集団でもあります。したがって、政治、経済、文化、自然科学に関する質問あるいは今日的課題、それへの本学の取り組み等についてのお声も、関係している教員あるいは組織があればおこたえして行きたいと思えます。さらに、教育機関として、本学がどのような学生を育てようとしているのかは重要な情報ですので、学生諸君の学内、学外の活動等に関してのお声も歓迎します。

このコーナーは、言わば、「山形大学が皆様へ」「皆様から大学へ」のお声かけの窓口です。お気軽にお声をお聞かせください幸いです。

みどり樹編集委員会

## 山形大学各種催事案内（平成12年1月から3月まで）

### 1. 平成12年度大学入試センター試験（3試験場）

- 1月15日(土) 山形市：山形大学小白川地区試験場
- 16日(日) 米沢市：山形大学工学部試験場
- 鶴岡市：県立鶴岡南高等学校試験場

### 2. 平成12年度山形大学個別学力試験等

#### (1) 一般試験（前期日程）

- 2月25日(金) 山形市：山形大学人文学部、理学部
- 米沢市：山形大学工学部(A、Bコース)
- 鶴岡市：山形大学農学部

- 2月25日(金) 山形市：山形大学教育学部、医学部
- 26日(土)

#### (2) 一般選抜（後期日程）

- 3月12日(日) 山形市：山形大学人文学部、教育学部、理学部、医学部

### 3. 平成11年度山形大学学位記・修了証書授与式

- 3月17日(金) 鶴岡地区（山形大学農学部）  
鶴岡市：東京第一ホテル鶴岡
- 3月22日(水) 米沢地区（山形大学工学部）  
米沢市：米沢市民文化会館
- 3月24日(金) 山形地区（山形大学人文学部、教育学部、理学部、医学部）  
山形市：山形県民会館

お問い合わせは、山形大学庶務部庶務課文書係まで（023-628-4008）

## 編集後記

山形の風土の特徴の一つに季節の移り変わりが比較的はっきりしているところがあると思いますが、私も山形市に住むようになってから、四方の山を眺めることが楽しくて、季節にはずいぶん敏感になりました。月山や朝日連峰の峰々が白く変わり、市内の民家の軒先においそそそな干し柿をみかけるようになって、今年もそろそろ厚手のセーターやコートを出そうかな、などと考えます。私が所属する人文学部で編入学試験や推薦入学試験が行われる頃になると、本格的な冬が駆け足でやってきます。山形大学でも、「入試の多様化」という社会的な流れの中で、一年を通して様々な入学試験が行われるようになってきました。しかしやはり入学試験シーズンの本番は冬です。この冬も多くの教職員が、なんらかの形で入学試験に関わります。受験生にとっても入学試験は人生の一大事ですが、ミスはなくてあたりまえ」という重圧の中で様々な作業に従事する大学の教職員にとっても、毎回たいへん緊張する行事です。本誌にも入学試験関連の情報が掲載されていますが、読者の中にも身内に受験生をお持ちの方や受験生の方もいらっしゃるかもしれません。本誌の記事を通して、身近に足を運べる大学として、山形大学の教育や研究活動に興味をお持ちいただければたいへんうれしく思います。

（みどり樹）編集委員会委員 山田 孝子

「みどり樹」に対するご意見・ご質問等をお気軽にお寄せください。お寄せいただいたご質問等には、本紙面に「皆様からのQ&A」コーナーを設けてお答えさせていただきます。

〒990-8560  
山形市小白川町一丁目4-12  
山形大学庶務部庶務課文書係  
TEL 023-628-4008  
FAX 023-628-4013  
Eメール syobun@kbureau.kj.yamagata-u.ac.jp

この「みどり樹」は、インターネットでもご覧になれます。  
アドレス <http://www.yamagata-u.ac.jp>

「みどり樹」は、3月・6月・9月・12月に発行する予定です。



この印刷物は再生紙を使用しています。